

# 琉球大学学術リポジトリ

HW446 『琉球人来朝記』をよむ：  
儀式の場での衣装という視点から

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学附属図書館<br>公開日: 2017-05-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 久貝, 典子, Kugai, Noriko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36633">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36633</a>                         |

HW446『琉球人来朝記』をよむ—儀式の場での衣装という視点から—  
Understanding HW446, *A Record of Ryukyans Visiting Japan*

琉球大学附属図書館 University of the Ryukyus Library  
久貝典子 KUGAI Noriko

## はじめに

琉球大学附属図書館では、「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」として、宮良殿内文庫、仲原善忠文庫、伊波普猷文庫、島袋源七文庫、阪巻・宝玲文庫をネット上で画像公開している。本稿で取り上げる HW446『琉球人来朝記』は、前掲5文庫のうちの阪巻・宝玲文庫219件(441点)所収の1件(3点)である。

現在公開中の阪巻・宝玲文庫デジタルアーカイブ資料は、概観すると江戸・明治・大正時代に区分できるが、HW446『琉球人来朝記』は、「江戸期琉球物」(横山 1987:P.147)に属する資料である。

「江戸期琉球物」とは、1634(寛永11)年から1850(嘉永3)年まで18回行われた琉球使節団の江戸立(江戸上り)<sup>1</sup>にちなんで刊行された書籍等の総体である。当時、琉球使節団の江戸立(江戸上り)は衆目を集め、出版業界を巻き込む「琉球ブーム」を形成した(横山 1981:PP.533-534)。その結果多数の「琉球物」が世にでることとなり、『琉球人来朝記』と命名された書籍が複数出版された。

『琉球人来朝記』は、将軍の世替わり・琉球王の襲封ごとに、幕府に対して派遣された琉球使節の江戸立(江戸上り)に関する行列記の一つで、本書は、写本・和綴じ冊子の構成となっている<sup>2</sup>。

『琉球人来朝記』という書名に関しては、写本をはじめ異なる年代で同名の書が刊行されているが、本稿で扱う HW446 は、1748(寛延元/乾隆13)年、徳川家重の第9代将軍就任(1745年将軍となる)を祝うために江戸へ立った慶賀使一行に関する記録である。全3冊あり、第1冊は『琉球人来朝記 一之二』、第2冊は『琉球人来朝記 三』、第3冊は『琉球人来朝記 四之五』とそれぞれに外題題僉が付されている。

『琉球人来朝記』に関しては、横山學氏の『琉球国使節渡来の研究』(吉川弘文館 1987)等の優れた先行研究があるが、本稿では、同氏の説を参照しながら、阪巻・宝玲文庫デジタルアーカイブ資料所収の他の『琉球人来朝記』と HW446 との比較を試みたい。その上で、江戸へ上がった琉球使節の移動と、使節を迎えた江戸城内の人々について、服飾の視点を取り入れて考察する。

## I. 『阪巻・宝玲文庫』所収の『琉球人来朝記』について デジタル版阪巻・宝玲文庫にみる『琉球人来朝記』

横山學氏は、江戸期琉球物資料を、内容から 1 使節渡来記録、2 書簡類、3 使節通行史料、4 御触書次の大項目4項に区分し、さらに1を①使節自体に関する記事②幕府側の準備の記録③城中での諸儀式的記録とし<sup>3</sup>、2 琉球国王から幕府・老中へ宛てた書簡類、3 使節が通行した街道に残った地方文書、4 市中・奉行所内へ通達された文書として分

類した（横山 1987：PP. 332-333・PP. 336-337）。聊か雑駁であるが、同氏の分類を参考にデジタル版阪巻・宝玲文庫所収の江戸立（江戸上り）関係資料を1-4に区分し、それらに関して検討を試みた。

本稿の資料として、琉球大学附属図書館 HP 上で公開されているデジタル版阪巻・宝玲文庫 219 件より、江戸立（江戸上り）に関する 66 点を抽出した一覧表を付する。これらは江戸立（江戸上り）の説明のある語彙を含むものの集積である。

資料は、刊本だけでなく写本も数多く存在した。写本には、例えば HW453『琉球来朝人名記録』<sup>4</sup>のように特定の人々の間で利用された可能性がある資料、HW452『天保三年来朝 琉球人行列記』<sup>5</sup>のように、貸本と思われるものが確認された。また、おおよその成立年や冊数を概観すると、刊本は写本より新しいものが多く、数も多い。横山學氏の指摘する近世出版文化の一般町人への浸透が認められる（横山 1987：PP. 194-195）。

江戸立（江戸上り）関連の刊行物は、1 項はいわゆる見ものとして百科事典的に使節団の江戸立（江戸上り）を取り上げたものが多い。HW444『琉球人来朝記』、HW445『琉球人参府記』のように、書名に『～来朝記』『～参府記』と命名されたものがあり、行列図や楽器図を挿入した資料が数多く存在する。特に 1832（天保 3）年は、京都書林・若林堂・丹波屋などの版元が一般町人をターゲットに、それぞれ『琉球人行列記』と命名した刊本を多数出している。江戸期琉球物を象徴する資料が多数認められる資料群である。

2 は琉球国王から幕府、老中にあてた公式文書である。デジタル版では独立した書簡集はなく、殆どが 1 に収録されている。

3 は、使節団用の夫役を課せられた宿駅や近隣の村が出した地方文書で、HW691（01）-（15）のような助郷関係資料が代表的である。

4 は琉球使節の通行について市中に出された御触書や、奉行所内での通達などが該当する。デジタル版では HW450『天保三壬辰年/琉球人参府/式朱吹立御触写』がある。

概観すると、1 に属する資料が半数以上であり、2 は殆ど 1 に含まれる。3・4 からは、使節を迎える地方に課せられた夫役や規制の実態などが窺える。3・4 は研究論文や著者が少なく、今後の進展が俟たれる。

#### HW446『琉球人来朝記』と他の類似資料との比較

デジタル版全体からみると、HW446『琉球人来朝記』は、前掲区分 1 に属する。

その他、デジタル版では HW444・447 のような同名本を確認できる。HW444 は第一-第七巻を合冊した本で、1 項で示された内容を網羅し、さらに「阿蘭陀献上物並名附」「阿蘭陀人名」等を収録するという特徴がある。HW447 は全十四巻、巻一-巻七が 1 冊に、巻八-巻十四が 2 冊めに収録されており、使節参府の際、市中に出された御触書について記している点が特徴である。HW444・447 とも、HW446 より幅広い内容で使節団参府について記している。

1748（寛延元）年に出版されたもの、または内容が類似する本は、他にも HW457『琉球聘使記』、HW458『戊辰琉球人来朝之式 全』がある。HW457 は荻生徂徠の著作で、主に使節団の江戸到着後の進見・奏楽・辞見等の各儀式についてまとめたもの。HW458 は、記事は寛延元年の記録であるが、成立年不明。12 月 15 日から同月 18 日まで行われた進見・奏楽・辞見の各儀式を、詳細にまとめたものである。

仲原善忠文庫にも同名本がある（No.097-100）。宝玲本・仲原本を比較すると、宝玲本

3巻に手描き彩色の「琉球人持道具之図」等が収載されているが、仲原本4巻は手描きだが無彩色の「琉球人道具之図」を収載する等、若干の差がある。内容的には宝玲本4・5巻は仲原本5・6・7巻と類似している。

HW446を幾つかある『来朝記』や類似資料の中で比較すると、使節団参府に関する記事をダイジェスト的に記載しているが、奏楽に関する記録は殆どない。また、他の『来朝記』に比較してボリュームもそれほど多くない。絵図資料に特色があるといえるが、数多くある『来朝記』写本の一つと位置付ける。

#### HW446(1) *A record of Ryukyans visiting Japan parts 1-2*

外題『琉球人来朝記 一之二』内題「琉球人来朝記卷之一」「琉球人来朝記 卷之二」を合冊収載。内題の記された頁に「慶應義塾図書館」「宝玲文庫」「小笠原蔵書印」の印記があるが、「小笠原蔵書印」(所有者不明)は消印が押されている。本書の作成年、作成者は共に不明である。

卷之一は「琉球人姓名並官職」「琉球人来朝記 琉球国の事略」を収載。「琉球人姓名並官職」では、正使・副使・賛議官・楽正・儀衛正・掌翰使・圀使・使賛・楽師・楽童子など、使者の主要メンバー21名のみ名前が記録されている。官職名に正使・具志川王子(尚承基)、副使・与那原親雲上(馬元烈)、賛議官・池城親雲上、楽正・平鋪親雲上の名前があり、1748(寛延元/乾隆13)年、徳川家重の第9代将軍就任祝賀(1745年将軍となる)のために江戸へ立った慶賀使一行の記録である。「琉球国の事略」では、概ね新居白石の「琉球国事略下」『南島志』(1719年)を参照している。

卷之二は「十二月十五日琉球人御礼之次第」を収載。進行については次の通り。まず具志川王子を江戸城西丸玄関で大目付の河野豊前守(河野通喬)、能勢因幡守(能勢頼庸)が出迎える。松平薩摩守(島津宗信)も登城。大目付2人は尚敬からの書簡箱を受け取り、具志川を殿上之間へ案内する。大広間上段に将軍が出御する。上位の士から順に指定の席へ着座、具志川は大広間二之間へ移動した。具志川はその後出仕の面々と対面(「具志川御礼之次第」)、南之板縁へ献上品が並べられた。

#### HW446(2) *A record of Ryukyans visiting Japan part 3*

外題『琉球人来朝記 三』。内題「琉球人来朝記卷之三」のみ収録。内題の記された頁に「慶應義塾図書館」「宝玲文庫」「小笠原蔵書印」(同印は見返しにもあり)の印記がある。目次は「十二月十五日於西丸ニ琉球中山王使者御礼之次第」「琉球中山王使者具志川王子於西丸御礼之次第」である。

(1)に続き、12月15日、具志川王子が尚敬より預かった中山王書簡(献上品目録)を大目付へ渡し、「大納言様」(徳川家治)に謁見した様子が記されている。場所は西丸大広間。進行は次の通り。まず本丸で挨拶をすませ、西丸へ登城した具志川を大目付二人が殿上之間下段へ案内着座させ、中山王書簡(目録)を受け取る。松平薩摩守も登城。大広間上段に大納言が着座すると、右近将監(うこんのじょう:松平武元)ほかの出仕の面々も大広間下段、西縁、南板縁、二之間まで順に着座し式に参列、具志川は殿上之間から大広間二之間へ移動した。琉球からの献上品は「南之板縁」へ並べられ、披露された。献上の品は尚敬王名代の具志川王子から公方(将軍)、大御所(徳川吉宗)、大納言へ贈られた。

#### HW446(3) *A record of Ryukyans visiting Japan parts 4-5*

外題『琉球人来朝記 四之五』。内題「琉球人来朝記卷四（ママ）」「琉球人来朝記 卷之五」を合冊収載。巻四の目録は「十二月十八日琉球人音楽並御暇之次第」、巻五は「十二月十八日於西丸琉球人御進物披露物次第」「琉球人途上送筋」「行列之次第」、使節登城の際、役目を言い渡された士の「覚」（備忘録）が収録されている。

巻四では、12月18日「奏楽の儀」が大広間で披露された様子を収録、当日は公方、大納言が大広間上段へ出御、楽正・楽師・楽童子らは大広間下段で音楽を演奏した。演奏が終わると具志川は薩摩守と二之間へ移動、右近将監が公方の労いの言葉を伝言し賜物が与えられた。賜物は中山王へ白銀100枚・綿500把、具志川王子へ白銀200枚・時服、従者へ白銀300枚、楽人へ時服3着ずつ。その後具志川王子は殿上之間へ移動、大目付持参の返簡を受け取り、同下段で「御菓子御吸物御膳」がふるまわれた。また従者は柳之間で「御菓子御吸物御湯」が出され、薩摩守は「帝鑑之間」で、薩摩守家来は蘇鉄之間で「御菓子御吸物」がふるまわれた。下官へも「強飯」がふるまわれた。

巻之五は「十二月十八日於西丸琉球人御進物披露物次第」（以下「御進物披露物次第」と略する）「琉球人登城送筋」「行列之次第」「琉球人登城之節出仕之面々供回り御城内差出之場所覚」（以下「覚」と略する）が収録されている。「御進物披露物次第」では、奏楽の儀が終わって大広間二之間へ出仕の面々が参列する中、具志川は殿上之間より大広間三之間へ移動、隠岐守・但馬守が、具志川へ大御所・大納言からの労いの言葉を伝えた。また、大御所・大納言からそれぞれ中山王へ白銀200枚・時服20着が与えられ、具志川王子へも同様に大御所・大納言より綿100把を与えられたとの記録が確認できる。「琉球人登城送筋」では帰途の手順を示し、「行列之次第」で具体的な列の組み方を記している。「覚」は、使節団登城の際に出勤した家来衆への案内の道筋や、注意事項を記したものである。

## II. 江戸立（江戸上り）の背景について

本稿で定義する江戸立（江戸上り）とは、徳川新将軍の襲職の慶賀と、琉球新国王の即位の謝恩のため、琉球国使節が江戸へ赴くことである（慶賀使・謝恩使）。島津氏の琉球侵攻後、1634（寛永11）年徳川家光の将軍襲職の慶賀使を派遣したことが江戸立（江戸上り）の始まりである。明治維新後の1872（明治5）年、尚泰王の使者が上京（維新慶賀使）、尚泰は藩王となり琉球藩が設置された\*（琉球藩事務所は外務省管轄）。江戸期では18回行われた。

表 A

| 役職名 | よみ     | 位       | 人数  | 職務内容                |
|-----|--------|---------|-----|---------------------|
| 正使  |        | 王子      | 1   | 国王の名代。              |
| 副使  |        | 親方 ㊦司官) | 1～3 | 正史の輔佐。              |
| 賛議官 | さんぎかん  | 親雲上     | 1～2 | 副使の輔佐。全体のまとめ役。      |
| 楽正  | がくせい   | 親雲上     | 1   | 座楽のまとめ役。            |
| 儀衛正 | ぎえいせい  | 親雲上     | 1   | 行列・路次楽のまとめ役。        |
| 掌翰使 | しょうかんし | 親雲上     | 1   | 書翰の担当。名筆家が就任。       |
| 圀師  | ぎよし    | 親雲上     | 1   | 献上の馬の世話役。           |
| 使賛  | しさん    | 親雲上     | 複数  | 正副使の用向き担当。          |
| 楽童子 | がくどうじ  | 里之子     | 複数  | 座楽・舞踊を演じる。元服前の少年たち。 |
| 楽師  | がくし    | 親雲上     | 複数  | 座楽・歌楽の奏者。           |
| 跟伴  | こんばん   |         | 複数  | 役人の従者。供の漢名。         |
| 醫師  |        |         | 1   |                     |

使者の役職・本来の位・職務内容等については、表 A の通りである。

### 使節団の旅程をめぐって

江戸立（江戸上り）の使者は、慶賀史・謝恩使同時の場合、総勢 100 名～200 人近くに上る例もあった。

旅程は、先行研究より、次の通りである。

旧暦 5～7 月頃（最多は 6 月）、琉球楫船などで那覇港を薩摩藩山川港へ向け出発、薩摩琉球館で 3 ヶ月～半年間滞在后江戸立の準備にかかる。薩摩藩川内から九州西海岸を北上しながら大阪へ入る西目、川内から東海岸沿いに大阪へ入る東目があった。難波津に到着すると大阪の薩摩藩蔵屋敷で逗留。伏見港までは淀川伝いに上り、伏見港上陸後は徒歩で江戸へ向かった。江戸までは草津（群馬）、二川宿（愛知）等を通過し、宿場や城下へ入る場合は直前に衣装を着替え、路次楽を演奏しながら入場した。大井川（静岡）は蓮台でわたった。

江戸城登城の際、行列は総勢 1000 人近くに膨らんだ。薩摩藩ほか、警護等で参加する大和の武士がいた。登城行列では概ね

儀衛正—路次楽—圀師—掌翰使—正使—副使—賛議官—楽正—楽童子—使賛  
の順に列を組んだ。

### 旅程を支えた人々

寛延元年の琉球人使節は、98 人であることが分かっている。行列の供は 1000 人以上、これほどの人数が登城するため、行列を指示し、誘導する武士たちにとって大仕事となった。HW455『天保三壬申年 琉球人参府之節勤方書留』は、江戸城西丸の五番方（小姓組）に関する武士の記録である。使節を迎え、城内を誘導するための稽古の方法（リハーサル）、正・副使担当者への諸指示、上役を迎えるための手順等、番頭（溝口備後守）から勤め衆への通達等が収載されている。頭 5 人を含め 44 人の姓名を記録している。同書本文から内容を一部紹介すると、

- 一 琉球人御暇之節被下物持方割今日差出候働溝口備後守殿被仰聞候ニ付左之通相認メ差出申候

大意は、辞見の儀の場で琉球の使者が頂戴する品を運ぶ係の割り当てについて、今日差出すことを溝口備後守にお伝えし、左の通りに認めて差し出したとあり、「中山王使者江被下物」の銀百枚を運ぶ役目に、神保八郎と秋田源次郎（前掲 44 人に含まれる）が割り当てられた。

HW691 (1)～(15)『琉球人参府関係諸書付』は、琉球使節の淀川遡航の際の綱引人足夫役（助郷）に関する覚・嘆願書・通達等を綴ったもので、HW691(1)は表紙相当、(2)～(4)・(6)琉球使節遡航用船の準備割り当てに関する覚、(5)・(14)村々の綱引き人足の負担軽減を嘆願した文書、(7)遡航の際の通達文、(8)綱引き人足に関する文書、(9)介助人足（助郷）を要請した嘆願書、(10)五組への銀高についての返信、(11)鳥飼・三ヶ牧の庄屋から近隣の庄屋・年寄りへ宛てた綱引人足への通達、(12)助郷役を課されたと思われる人々の名簿、(13)助郷役の割り



図 1

当て人数を記した覚（18 村 450 人）、(15)鳥飼村の助郷役勤め高に関する

る記録簿という内容である。

HW691は、概観すると鳥飼村・三ヶ牧村の庄屋衆から助郷役、又は奉行へ向け出した文書を集めたもので、淀川沿いにあった鳥飼村・三ヶ牧村近隣への助郷役が450人割り当てられていたことが記されている。ちなみに寛延元年の『入来琉球記』によると、綱引人足は750人、献上用荷物が135個に及び、淀川周辺から人足1300人であったという（横山 P.387:1987）。江戸立（江戸上り）がいかに大事業であったか理解できる。

### Ⅲ. 江戸立（江戸上り）で着用した冠服について

#### 琉球の装束

琉球の装束は王府の階級制度によって定められていた。

表Bは、鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』（岩波書店 1982）所収の『江戸立之時仰渡并応答之条々写』『琉球国中山王府官制』

（PP.230-233）を参照して作成した。同資料では、職制の品級（階級）、位階名に従って領地・俸禄（俸禄米。現在の給与）が定められ、衣服も階級によって被り物・衣服、帯・履物・服飾品など全て決まっていたことが記されているが、表B作成では、衣冠に関する情報のみに着目した。江戸立（江戸上り）の場合は中国風の装束で、正史（位は王子弟、または按司クラス）

は紗帽（P.5、図1参照）、副使（親方クラス）以下は帕（ハチマチ。冠。前掲『江戸立之時仰渡并応答之条々写』より筆者書写。図

2①参照）を被った。但し、帕は階級により紫・黄・紅の色分けがある。衣服は副使までは章服、それ以外の使者は琉装であったが、これも位により布の種類・色・柄などが異なった。楽童子のみ、髻を結び、花簪・簪（図2②a・②b参照）を差し、琉装であるが赤色の返衿の大袖衣装を着た。なお、P.5図1・P.6図2・P.7図3は、図録『尚家継承琉球王朝文化遺産』（琉球新報社 1993）所収、那覇市歴史博物館所蔵尚家関係資料所蔵の「冠服簪図」「唐冠服図」を、同博物館の許可を得て引用した（PP.70-71）。

表B

| 役職  | 位階    | 位      | 被り物ほか | よみ   | 衣服        | よみ    | 生地    | 備考             |
|-----|-------|--------|-------|------|-----------|-------|-------|----------------|
| 正使  | 一品    | 王子弟・按司 | 紗帽    | サアマウ | 章服        | チャンフウ | 綸子・縮緬 | 履物は鞋（アイ）       |
| 副使  | 二品    | 親方     | 紫冠    | ツイキン | 章服        | チャンフウ | 綸子・縮緬 | 鞋              |
| 使者  | 二品～七品 | 親雲上    | 黄冠    | ハチマチ | 黒朝（琉装・唐風） | クルチョウ | 絹・苧麻他 | 鞋              |
| 使者  | 八品～九品 | 筑登之    | 紅冠    | ハチマチ | 琉装（唐風）    | クルチョウ | 絹・苧麻他 | 鞋              |
| 楽童子 |       |        | 髻・簪   |      | 琉装（唐風）    |       | 綸子・縮緬 | ケーシクビ（返衿・赤色）・鞋 |

ところで、池宮正治氏は「琉球国王の赤きみけし 一唐衣裳一」（『首里城研究 No.1』首里城公園友の会 1994）において『球陽』付巻尚敬14（1726）年の条を引用し、「往古より国命を齎奉して薩摩藩主にまみえる時には明服を着用してきており」「日本（薩摩）



①

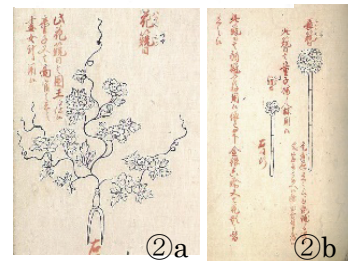


図2





図3

へ出て行く使者は長く明服を着用していたのである」と述べている。図1の「紗帽」には、これと同様の論理で、同氏の説を裏付ける説明文が付されている（鎌倉：1982）。大意は以下の通り。「琉球国王は明太祖皇帝より国王に封せられた時から皮弁冠を被り、琉球の官人も紗帽を被るようになった。清代に変わり、琉球国王が清より王に封せられても、王は明の皮弁冠、官人は紗帽を用いる」<sup>6</sup>。

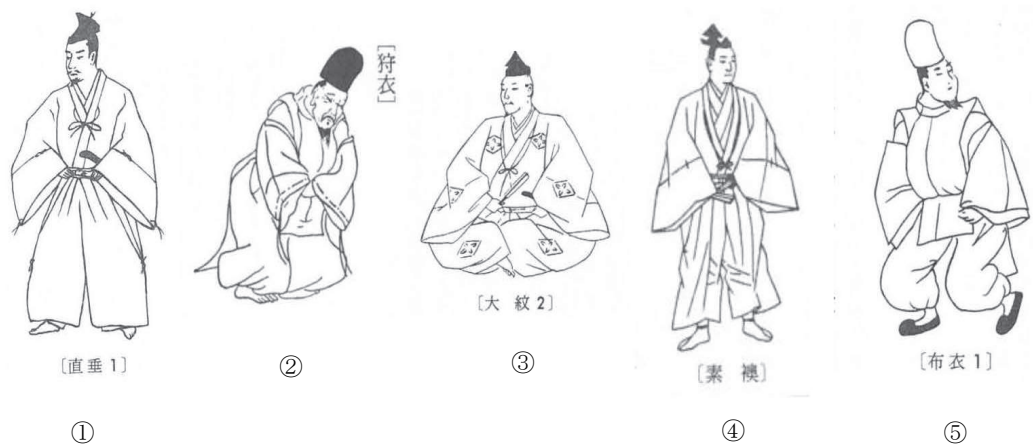
衣服については、正・副使までは章服、以下の使者は琉装だった。章服については、図3の「下着」の上に各階級にあった素材・織り・色の「服」（前掲『江戸立之時仰渡并応答之条々写』より筆者書写）を着る。琉装とは、和装に比べると返し衿（ケーシクビ）<sup>服</sup>・広袖・脇スビ（マチ）がある等の特徴がある。楽童子の衣服は、返し衿・裏は赤で振袖である等、鮮やかさを強調したものであった。

### III-2. 武士の装束

武士は、近代封建社会の階級制度に従い、それぞれの階級に決められた衣冠を着用した。装束の様式は公家の有職故実に倣ったものである。直垂は鎌倉時代の武士の礼装であるので、武士の台頭とともに従四位以上（将軍～侍従：御三家、高家、10万石以上の国主）の人々が着用するようになった。

江戸城内での儀式の場においては、各階級とも着用する衣冠や定位置が決まっていた。衣冠については、将軍・侍従以上（従一位～従四位）は直垂、四位（四品とも）は狩衣、五位（諸大夫/正五位上～従五位下）は大紋、無位無冠だが御目見以上の士は布衣、御目見以上の士は素袍、という区分であった。それぞれの位の着用する装束を、図4①②③④⑤で示す。

図4



※図4①③④⑤は新村出編『広辞苑』第5版（岩波書店 1998）より、②は松村明編『大辞林』（三省堂 2006）より引用した。



表Cは、HW446を元に、各位の武士の居場所についてまとめたものである。表C及びその他資料を参照に、武士の装束について概観する。将軍・侍従以上の着用する直垂は、徳川御三家・水戸御三卿、従四位以上の親藩に限定された。寛延元年の江戸立（江戸上り）の際には、直垂着用の大納言（徳川家治）が大広間殿上之間へ出座。松平薩摩守は長袴を着用して出座した。従四位下以上は狩衣着用で二之間へ、旗本（御目見以上）は布衣、御家人素襖は素襖を着、集合した武士の誘導等を担当したようである。なお、具志川王子が拝領した時服とは、将軍家より褒賞としてもらう衣服のこと。小袖などが主であった。また、松平薩摩守が着用した長袴とは、殿中での礼装に用いる、裾が地を引くほど長い袴のことである。

| 巻数 | 役職    | 服飾名   | よみ      | 場所・担当 | 位階         | 備考         |  |
|----|-------|-------|---------|-------|------------|------------|--|
| 二  | 大目付   |       |         | 玄関出迎  | 従六位相<br>当  |            |  |
|    | 出仕之面々 | 直垂    | ひたたれ    | 殿上之間  | 従四位上       |            |  |
|    |       | 狩衣    | かりぎぬ    |       | 従四位下       |            |  |
|    |       |       | 大紋      | だいもん  |            | 五位         |  |
|    |       |       | 布衣      | ほい    |            | 六位以下<br>無冠 |  |
|    |       |       | 素袍      | すおう   |            | 六位以下<br>無冠 |  |
|    | 諸大夫   |       | しょだいぶ   | 雁の間   | 従五位下<br>無冠 |            |  |
|    | 御奏者番  |       | おそうじゃばん | 菊の間   | 六位相当       |            |  |
|    | 四品    |       | しほん     | 二の間   | 従四位        |            |  |
|    | 役人    | 布衣以上  |         | 三の間   |            |            |  |
| 三  | 役人    | 布衣以上  |         | 西丸    |            |            |  |
|    | 出仕之面々 | 直垂    |         | 西丸    |            |            |  |
|    |       | 狩衣    |         | 西丸    |            |            |  |
|    |       |       | 大紋      |       | 西丸         |            |  |
|    |       |       | 布衣      |       | 西丸         |            |  |
|    |       |       | 素袍      |       | 西丸         |            |  |
|    |       | 大納言   | 直垂      | だいなごん |            |            |  |
|    |       | 役人    | 布衣以上    |       | 三之間        |            |  |
|    | 四     | 出仕之面々 | 直垂      |       | 殿上之間       |            |  |
|    |       |       | 狩衣      |       |            |            |  |
|    |       |       | 大紋      |       |            |            |  |
|    |       |       | 布衣      |       |            |            |  |
|    |       |       | 素袍      |       |            |            |  |
|    |       | 大納言   | 直垂      |       | 大広間        |            |  |
|    | 具志川王子 | 時服    | じふく     | 二之間   |            | 大御所より贈物    |  |
|    | 御奏者番  | 布衣以上  |         | 芙蓉之間  |            |            |  |
| 五  | 松平薩摩守 | 長袴    | ながばかま   |       | 従四位上       |            |  |
|    | 具志川王子 | 時服    | じふく     | 大広間   |            |            |  |
|    | 薩摩守家来 | 布衣    | ほい      | 行列    |            |            |  |
|    | 麻上下   |       | あさじょうげ  | 行列    | 無位無冠       |            |  |

#### IV. まとめ

琉球使節の江戸立（江戸上り）研究に関し

ては、横山学、宮城栄昌、真栄平房昭、豊見山和行、池宮正治、小野まさ子ほか、先学の研究によって諸相が明らかにされている。今回の報告では、先学の諸説に依りながら、HW446『琉球人来朝記』について儀式の場での衣装という視点から解説・解説を試みた。

以下の点について、今後の取り組みかたを挙げておく。まず、HW446と同類の他資料との比較が不十分であった点については、今後も幅広く資料を解説し、比較を試みる。次に表Cに関しては、現在江戸城内部を描いた絵図資料に関する研究が進み、城内における儀式をよりビジュアル化できるような状況下にある。それら資料を有効に活用し、HW446等の文字資料と比較する方法を試み、より具体的なデータとして仕上げる。このような作業を積み重ねてゆけば、現在よりも近世の儀式の場で用いられた衣装についてより分かり易く理解できるようになると考えている。

表C

#### 註

- 「江戸上り」表記については、琉球の使者が「江戸へ赴くこと」をいい、「幕府及び薩摩は異国支配の事実を新たにし、それによって幕府および薩摩は異国支配の事実を天下に示して権威を誇った」とする宮城栄昌氏の説が主な裏付けとなっている（『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983）。つまり、同氏の説には琉球から江戸へ「上る」という概念がある。横山學氏も同氏の説に賛同し、『江戸期琉球物資料集覧全4巻 宝玲叢刊 第4集』（本邦書籍 1981）、『琉球国使節渡来の研究』（吉川弘文館 1987）で「江戸上り」表記を用いた。他方、「江戸立」（えどたち・えどだち/えどたて）表記は、真栄平房昭氏が主に主張した説である。真栄平氏は「琉球使節の江戸参府」『沖縄県の歴史』第5章の中で「琉球側では従属的な上下関係を含意する「江戸上り」ではなく、むしろ対等の意識をあらわす「江戸立」という表現を多く

用いた（「評定所文書」参照）。つまり、幕府と琉球の間には、「従属」と「自立」をめぐる微妙な意識の違いが存在したのである（山川出版 2004 P.146）という見解を示している。豊見山氏も真栄平氏の主張に賛同し、「敗者の戦略としての琉球外交－「唐・大和の御取合」を飼い慣らす－」（2009）の文中で「江戸上りの用語は近代になって使われたもので、江戸幕府へ従属している点を表すもの」と述べている。本稿においても、『沖縄文化の遺宝』より参照した資料は『江戸立之時仰渡并応答之条々写』、つまり表題に「江戸立」が用いられているので、「江戸立」表記でもよいと考える。しかし、議論に立ち入ることは本題から逸れるので、本稿では「江戸立（江戸上り）」と併記して用いることにした。

2. 「阪巻・宝玲文庫」HW446(1)、同(2)、同(3)（琉球大学附属図書館『琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ』）画像参照のこと。
3. 1項の細目は以下の通り。①（1）使節の構成・官職名・使者名、（2）献上物・拝領物、（3）奏上音楽曲目、（4）国王から老中へ、老中から国王への書翰、（5）行列の構成図・琉球楽器の図、②（1）使節渡来決定後の大目付・御目付の任命、（2）到着直後と使節滞在中、市中に出された風俗規制・不作法禁止の御触書、（3）登城の道筋、（4）人足・伝馬等の費用の記録。
4. 本書は、人名・人名よみのみしか記載がない、奥付等書誌情報がない資料である。ただし、「琉球国使節者名簿」（横山學『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館 1987）より、1796（寛政8）年の記録であることが確認できる。
5. 最初に奥付を収載。それによると版元は丹波屋新左衛門、発行は京都書林の菱屋弥兵衛と記されている。
6. 横山學氏は、この問題について、島津氏による「異国琉球」の姿の強調という演出があり、島津氏が、異国として強調された使節を従えて江戸に上ることで幕府の厚遇を得たという見解を示している（横山 P.68・PP. 167-169）。

## 引用・参考資料

- 安里進・豊見山和行編 『沖縄県の歴史』第47巻 山川出版 2004年
- 池宮正治「琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵『冊封使渡来之時之覚書』」『琉球大学附属図書館報「びぶりお」』第27巻第1号 琉球大学附属図書館 1994年
- 池宮正治「琉球服飾史の課題」『首里城研究 No.4』首里城公園友の会 1998年
- 井筒雅風『現色 日本服飾史』光琳社 1982年
- 沖縄県文化振興会公文書管理部 史料編集室編『沖縄県史ビジュアル版8 近世② 江戸上り ～琉球使節の江戸参府～』沖縄県教育委員会 2001年
- 紙屋敦之『歴史のはざまを読む－薩摩と琉球－』榕樹書林 2009年
- 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店 1982年
- 州立ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会監修・横山學解題『宝玲叢刊全四巻』第1巻・同第2巻・同第3巻・同第4巻（株）本邦書籍 1981年
- 国書刊行会編『新井白石全集 第三巻』国書刊行会 1977年
- 鈴木敬三『有職故実図典 一服装と故実一』吉川弘文館 1995年
- 東京都江戸東京博物館編『特別展 徳川の城～天守と御殿～』東京都江戸東京博物館 2015年
- 豊見山和行「報告二 敗者の戦略としての琉球外交－「唐・大和の御取合」を飼い慣らす－」『史苑』第70巻第2号 立教大学史学会 2010年
- 深井雅海『図解・江戸城をよむ』（株）原書房 1997年

宮城栄昌『琉球使者の江戸上り』南島文化叢書4 第一書房 1982年  
 平井聖編 歴史群像シリーズ『図説江戸城その歴史としくみ 決定版』学研 2008年

資料：阪巻・宝玲アーカイブス資料にみる江戸立（江戸上り）関係資料

| No. | HW番号*  | 資料名                  | 出版(成立)年 | 編著者                  | 出版者  | 備考1                                | 備考2 |   |
|-----|--------|----------------------|---------|----------------------|--|------------------------------------|-----|---|
| 1   | 441    | 琉球紀事                 | 1780頃   | 不明                   |  | 寛文11(1671)年・宝永6(1709)年ほかの記録        | 写本  | 1 |
| 2   | 442    | 寛政二年八年琉球人来聘          | 不明      | 不明                   |  | 寛政2(1790)・同8(1796)年の記録             | 写本  | 1 |
| 3   | 443    | 宝永七庚寅年琉球国来聘使日記       | 不明      | 不明                   |  | 宝永7(1710)年/料理の記録あり                 | 写本  | 1 |
| 4   | 444    | 琉球人来朝記               | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年                         | 写本  | 1 |
| 5   | 445    | 琉球人参府記               | 1710以降  | 不明                   |  | 宝永6(1709)・同7(1710)年                | 写本  | 1 |
| 6   | 446(1) | 琉球人来朝記 一之二           | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年                         | 写本  | 1 |
| 7   | 446(2) | 琉球人来朝記 三             | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年                         | 写本  | 1 |
| 8   | 446(3) | 琉球人来朝記 四之五           | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年                         | 写本  | 1 |
| 9   | 447(1) | 琉球人来朝記 自一至七          | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年                         | 写本  | 1 |
| 10  | 447(2) | 琉球人来朝記 自八至十四終        | 不明      | 不明                   |  | 寛延元(1748)年/屋良里之子・本因坊の囲碁対決記録あり      | 写本  | 1 |
| 11  | 448(1) | 琉球人行列記               | 1832    | 丹波屋新左工門<br>金春市之丞     | 京都書林(菱屋弥兵衛)                                  | 序文あり/天保3(1832)年/奥付に「薩州御出入方御免判元」とあり | 刊本  | 1 |
| 12  | 448(2) | 琉球人行列記               | 1832    | 丹波屋新左工門<br>金春市之丞     | 京都書林(菱屋弥兵衛)                                  | 序文あり/天保3(1832)年/奥付に「薩州御出入方御免判元」とあり | 刊本  | 1 |
| 13  | 448(3) | 琉球人行列記               | 1832    | 丹波屋新左工門<br>金春市之丞     | 京都書林(菱屋弥兵衛)                                  | 序文あり/天保3(1832)年/奥付に「薩州御出入方御免判元」とあり | 刊本  | 1 |
| 14  | 448(4) | 琉球人行列記               | 1832    | 丹波屋新左工門<br>金春市之丞     | 京都書林(菱屋弥兵衛)                                  | 序文あり/天保3(1832)年/奥付に「薩州御出入方御免判元」とあり | 刊本  | 1 |
| 15  | 449    | 琉球解語                 | 1832    | 富岡手島校訂<br>一立齋(歌川)廣重図 | 若狭屋与市(東都之神明前・若林堂?)                           |                                    | 刊本  | 1 |
| 16  | 449-c2 | 琉球解語                 | 1832    | 富岡手島校訂<br>一立齋(歌川)廣重図 | 若狭屋与市(東都之神明前)若林堂                             | 449とほぼ重複                           | 刊本  | 1 |
| 17  | 450    | 天保三壬辰年/琉球人参府/式朱吹立御触写 | 1832    | 不明                   | 不明   | 老中が配下に通達                           | 写本  | 4 |
| 18  | 451    | 琉球人大行列記              | 1790    | 塩谷喜助<br>伊勢屋庄助        | 辨装堂  | 前川六左衛門?                            | 刊本  | 1 |
| 19  | 452    | 天保三年来朝 琉球人行列記        | 1832    | 薩州御出入方?              | 版元 伏見箱屋町<br>丹波屋新左工門<br>同下板稿 兼春市之丞 京都書林 菱屋弥兵衛 | 人名あり。                              | 写本  | 1 |
| 20  | 453    | 琉球来朝人名記録             | 1796    | 不明                   |  |                                    | 写本  | 1 |
| 21  | 454    | 琉球聘使畧                | 不明      | 不明                   |  | 1832(天保3)年の記録                      | 写本  | 1 |
| 22  | 455    | 天保三壬辰年琉球人来府之節勤方書留    | 1832    | 写本(近藤)               |  |                                    | 写本? | 1 |

|    |        |                         |      |                       |                                |   |    |   |
|----|--------|-------------------------|------|-----------------------|--------------------------------|---|----|---|
| 23 | 456    | 琉球聘使記                   | 1738 | 荻生徂徠                  |                                | 1710(元文3)年の記録                                   | 写本 | 1 |
| 24 | 457    | 琉球聘使記                   | 1748 | 荻生徂徠                  |                                | 1710(元文3)年の記録                                   | 写本 | 1 |
| 25 | 458    | 戊辰琉球人来朝之式 全             | 不明   | 不明                    |                                | 1748(寛延元)年の記録                                   |    | 1 |
| 26 | 459    | 琉球人大行列記                 | 1752 | 河南四郎右衛門<br>日野屋半兵衛     | 辨装堂                            | 1752(宝暦2)年までの記録                                 | 刊本 | 1 |
| 27 | 460-c1 | 琉球入貢紀略                  | 1850 | 山崎美成                  | 静幽堂・山城屋佐<br>兵衛/静幽堂は鍋<br>田三善の書齋 | 秋巖原輩(萩原秋巖)書・<br>晶山老人(鍋田三善)編                     | 刊本 | 1 |
| 28 | 460-c1 | 琉球入貢紀略                  | 1850 | 山崎美成                  | 静幽堂/静幽堂は<br>鍋田三善の書齋            | 秋巖原輩(萩原秋巖)書・<br>晶山老人(鍋田三善)編                     | 刊本 | 1 |
| 29 | 461    | 琉球入貢紀略                  | 1832 | 山崎美成                  | /鍋田三善が木雉<br>窩書屋で写              | 読経齋主人書  | 刊本 | 1 |
| 30 | 463    | 琉球国聘使記                  | 不明   | 荻生徂徠                  |                                | 1710(元文3)年の記録                                   | 写本 | 1 |
| 31 | 464-c1 | 琉球奇譚                    | 1832 | 米山子                   |                                | 琉球の地理・文化などに関<br>する読み物                           | 刊本 |   |
| 32 | 464-c2 | 琉球奇譚                    | 1832 | 米山子                   |                                | 琉球の地理・文化などに関<br>する読み物                           | 刊本 |   |
| 33 | 465    | 琉球唱曲                    | 不明   | 不明                    |                                | 琉球使節が江戸城内で奏上<br>した「唱曲」の歌詞の記録                    |    | 1 |
| 34 | 466    | 琉球人御礼の次第                | 不明   | 不明                    |                                | 1806(文化3)年の記録                                   | 写本 | 1 |
| 35 | 467    | 中山国使略                   | 1850 | 富岡手高校正                | 東都芝神明前若狭<br>屋與市(若林堂)           | 1850(嘉永3)年の記録                                   | 刊本 | 1 |
| 36 | 468a   | 中山聘使略                   | 1832 | 阪本純宅甫(阪宅甫)            | 永斎蔵板                           |   | 刊本 | 1 |
| 37 | 468b   | 中山聘使略                   | 1832 | 阪宅甫(阪本純<br>宅)         | 永斎蔵板                           |   | 刊本 | 1 |
| 38 | 468c   | 中山聘使略                   | 1832 | 阪本純宅甫(阪宅<br>甫)/上書き跡あり | 永斎蔵板                           |   | 刊本 | 1 |
| 39 | 494(1) | 琉球往来(上)                 | 1874 | 袋中                    |                                | 1867(慶応3)年までの記録<br>/1874(明治7年7月18日外務<br>省書庫より書写 | 写本 |   |
| 40 | 494(2) | 琉球往来(下)                 | 1874 | 袋中                    |                                | 1867(慶応3)年までの記録<br>/1874(明治7年7月18日外務<br>省書庫より書写 | 写本 | 1 |
| 41 | 557    | 琉球百韻                    | 1808 | 牧野履                   | 私製本                            | 文化3年使節の賛議官を務<br>めた久志安昌の稿本に手を<br>加えたもの           | 拓本 | 1 |
| 42 | 578(1) | 東游艸 琉球鄭元偉著 上            | 1843 | 鮫島玄霧・黒田恒<br>校正        | 尋雲堂蔵版                          | 鄭元偉が江戸立の際に詠ん<br>だ歌を収載                           | 刊本 |   |
| 43 | 578(2) | 東游艸 琉球魏學賢著 中            | 1843 | 鮫島玄霧・黒田恒<br>校正        | 尋雲堂蔵版                          | 魏學賢が江戸立の際に詠ん<br>だ歌を収載                           | 刊本 |   |
| 44 | 578(3) | 東游艸 琉球尚元魯著 下            | 1843 | 鮫島玄霧・黒田恒<br>校正        | 尋雲堂蔵版                          | 尚元魯が江戸立の際に詠ん<br>だ歌を収載                           | 刊本 |   |
| 45 | 682    | 琉球人方御長持御差物請帳            | 不明   | 不明                    |                                |   | 写本 | 1 |
| 46 | 685    | 文化三寅年琉球人綱引人足割方帳         | 1806 | 不明                    |                                |   | 写本 | 3 |
| 47 | 686    | 琉球人諸事一件之控/琉球人一件<br>帳    | 1832 | 不明                    |                                | 数年にわたる記録の集成                                     | 写本 | 3 |
| 48 | 687    | 天保三年辰十月琉球人参府二付綱引<br>人足帳 | 1832 | 不明                    |                                |   | 写本 | 3 |

|    |         |                                |      |             |  |                            |    |   |
|----|---------|--------------------------------|------|-------------|--|----------------------------|----|---|
| 49 | 688     | 天保三辰年十月琉球人綱引人足帳                | 1832 | 不明(田中善左衛門?) |  | 1806(文化3)年の記録あり            | 写本 | 3 |
| 50 | 689     | 天保十三年寅十月琉球人参府諸事留帳              | 1842 | 不明(高崎金之進?)  |  |                            | 写本 | 3 |
| 51 | 690     | 大津一件琉球人国役金並水教寺太鼓共入用二付右三勾取集メ高覚帳 | 1843 | 不明          |  |                            | 写本 | 3 |
| 52 | 691(01) | 琉球人参府関係諸書付/表紙                  | 不明   | 不明          |  | HW691(1)-(15)の表紙           | 写本 | 3 |
| 53 | 691(02) | 琉球人参府関係諸書付/覚                   | 不明   | 不明          |  | 各藩の船数割り当てに関する覚             | 写本 | 3 |
| 54 | 691(03) | 琉球人参府関係諸書付/覚                   | 不明   | 不明          |  | 小屋形船を担当する村・人足数の覚           | 写本 | 3 |
| 55 | 691(04) | 琉球人参府関係諸書付/覚                   | 不明   | 不明          |  | 各村へ課する人足のランク・人数の覚          | 写本 | 3 |
| 56 | 691(05) | 琉球人参府関係諸書付/口上                  | 1832 | 不明          |  | 人足不足に対する庄屋から上への陳情書         | 写本 | 3 |
| 57 | 691(06) | 琉球人参府関係諸書付/覚                   | 不明   | 不明          |  | 各藩の船数割り当てに関する覚             | 写本 | 3 |
| 58 | 691(07) | 琉球人参府関係諸書付/通達                  | 1832 | 西嶋源左衛門      |  | 陳情書                        | 写本 | 3 |
| 59 | 691(08) | 琉球人参府関係諸書付/通達                  | 不明   | 庄屋・年寄       |  | 通達                         | 写本 | 3 |
| 60 | 691(09) | 琉球人参府関係諸書付/書簡                  | 不明   | 不明          |  | 陳情書                        | 写本 | 3 |
| 61 | 691(10) | 琉球人参府関係諸書付/書簡                  | 不明   | 中村秀五郎       |  | 銀高について/西嶋源左衛門宛/1832(天保3)年か | 写本 | 3 |
| 62 | 691(11) | 琉球人参府関係諸書付/口上                  | 1832 | 不明          |  | 通達                         | 写本 | 3 |
| 63 | 691(12) | 琉球人参府関係諸書付                     | 不明   | 不明          |  | 淀川近辺の綱引人足に関する覚             | 写本 | 3 |
| 64 | 691(13) | 琉球人参府関係諸書付/覚                   | 不明   | 不明          |  | 淀川近辺の綱引人足に関する覚             | 写本 | 3 |
| 65 | 691(14) | 琉球人参府関係諸書付/口上                  | 1832 | 不明          |  | 淀川近辺の綱引人足に関する覚             | 写本 | 3 |
| 66 | 691(15) | 琉球人参府関係諸書付/助郷高書付               | 不明   | 不明          |  | 助郷勤高の記録簿                   | 写本 | 3 |

※HW 番号の欄で寛延元年に出た資料は、灰色でマーキングした。